

とりかへばや物語論に見る「退廃性」の正体

—「とりかへばや物語」教材化に向けての一考察—

経済学部経済学科教授 前 比呂子

1 はじめに—評価の形成過程をたどることの意味

「とりかへばや物語」は、活発で外向的な女兒と引っ込み思案で内向的な男児の異母^{きょうだい}兄妹が、その生来の性格のままに行動するうちに、女兒は「若君」、男児は「姫君」として周囲に認知され、そのまま貴族社会の中での性別役割を懸命に果たして生きるが、異性との交渉、出産というハプニングを経て本来の性（生物学的性）と一致した生き方（社会的性）に戻り大団円を迎えるという王朝サクセスストーリーである。成立は平安時代の末期と考えられ、無名草子の記述から当時『とりかへばや』とその改作である『今とりかへばや』の両本があり、現存する「とりかへばや物語」は『今とりかへばや』のことであることがわかっている。因みに、この両本について無名草子は、《ただ今聞えつる『今とりかへばや』などの、本^{もと}にまさり侍るさまよ。何事も物まねびは、必ずもとは劣るわざなるを、これは、いとにくからずをかしくこそあめれな。》《かかるさまになる、うたてけしからぬすぢには思えず》〔こんな（男女がその本性に反した姿）になるのも、いやらしくとがむべき構想とは思えません〕と『今とりかへばや』（現存する「とりかへばや物語」）を高く評価している。

しかし、近代に入ると、とりかへばや物語は、研究者からバッシングにも近い酷評を受けることになる。「醜穢読むに堪へざる」「嘔吐を催ほす」等の激しいフレーズで知られる文学博士藤岡作太郎の評言（出典等後述）がその最たるもので、戦後も長くその「とりかへばや観」は引き継がれ、名だたる古典文学全集への収録は、いずれも「新」や「新編」が付く、新日本古典文学大系1992年、新編日本古典文学全集2002年、を待たねばならなかった。つまり、とりかへばや物語は、漸く近年その価値が見直されはじめた、言わば「これからの作品」である。また、深層心理学の観点からの評論（参考文献Ⅱの③）が出版されるなど、アプローチによっては、現代を生きる私たちが抱える課題にもさまざまな手がかりを与えてくれる作品である。そういう意味で、筆者はこの物語が、今後教育現場で教材として積極的に活かされるべきだと考えている。

そのために必要なのは、いっさいの先入観を廃して作品に向きあうことである。それは、とりかへばや物語をめぐる旧来の評価（以後「旧来のとりかへばや観」とする）をなかったかのように無視することではない。むしろ、どのようにそれが形成されてきたのかを検証する作業を通してこ

そ、私たちはその囚われから自由になることができるのである。

本稿では、そのような立場から、現在へと続くひとつの時代の「とりかへばや物語論」を基に作品を読み返すことで、私たちとこの物語を隔てていた障壁を解明していきたい。また、このように形成された「とりかへばや観」が、現在の教育現場にどのように影響を与えているのかについて検証し、教材化に向けての一助としたい。

2 1970年代のとりかへばや物語論より

(1) 時代背景

筆者は、とりかへばや物語をめぐる評価に変化が現れ始めた時期を、前述した刊行物等の出現から1990年前後と考えている。これはジェンダーということばが広く使われはじめた時期と重なる。「社会及び家庭における男子の伝統的役割を女子の役割とともに変更することが男女の完全な平等の達成に必要であること」「あらゆる分野において女子が男子と平等の条件で最大限に参加すること」を謳った女子差別撤廃条約にわが国が署名したのが1980年。むろんこの条約ひとつで社会の状況が一変したわけではないが、たとえ徐々にではあっても、とりかへばや物語を新たな目で読むことのできる土壌が育ってきたことは確かである。本章では、その前夜に位置する1970年代の「とりかへばや物語論」が、過去に形成された「定評」をどのように引き継ぎ、現在にどのような影響を及ぼしたのかを見ていきたい。

用いるのは、とりかへばや物語研究に多くの功績を残した研究者鈴木弘道の労作「とりかへばや物語の研究 校注編・解題編」(1973年発行 笠間書院)と、中村真一郎の著書「日本古典に見る性と愛」(1975年発行 新潮社)である。前者が研究者を中心に本文・注釈書として広く読まれ多くの著作の「参考文献」に頻出する研究書であるのに対し、後者は1973年朝日新聞に30回にわたって連載されたエッセイをもとに再構成された評論集で、一般の人々にも広く読まれたものである。

(2) 旧来の評言の継承

鈴木弘道は前掲「とりかへばや物語解題」「五 特色」「[1] 性転換」の中で、「世間には、この性転換の物語であるということだけで好奇心を抱き、直ちに淫猥なる作品と決めつけてしまう傾向がないでもなく」と述べ、その淵源を「藤岡作太郎博士の名著『国文学全史 平安朝篇』(明治38年)における次の評言ではないだろうか。」として前掲部分を含む200字に余る引用を行っている。また鈴木は同章において「二人の性転換は、女性の性格・態度から解放されることのない外面的な男装、男性の性格・態度から解放されることのない外面的な女装という一種の変装」として「取り替え」の本質を押さえている。しかし上記の藤岡評引用の後に、「行き過ぎの感はあるものの、全然心当たりがないというわけでもない」とし、この章の終わりを「以上、とりかへばや物語に描か

れた特異な性転換の意義を考察したが、性転換そのものによる物語の退廃性は、意外にもそれほど多くないことを、ここにあらためて認識すべきであろう。」という文で締めくくっている。藤岡評は「行き過ぎ」であるが「(1) 心当たりがないわけではない」、「(2) 性転換そのものによる物語の退廃性は、意外にもそれほど多くない」というのが鈴木¹⁾の結論である。(1)とは(2)のことであるから、鈴木は藤岡評を全面否定するのではなく、(1)=(2)として「部分修正」の形で引き継いでいるのである。鈴木²⁾の「心当たり」である「退廃性」の正体を追ってみた。

(3) 「変態的」とされたこと

次章「〔Ⅱ〕愛情の種々相」の(1)「退廃的愛情」から、「退廃性」の具体的な中身を見ていく。鈴木は姫君(女主人公)について以下のように述べる。

「まず、女性間の同性愛的関係は、男装の姫君を中心にして展開されるが、姫君の行動には、きわめて変態的な面が見られる。すなわち、彼女は男装という一種の人為的な技巧をもって多くの女性たちを惑わせ、しかも、これらの女性たちをして恋愛関係を結んでいると思わせることに、みずから快感を覚えているのである。したがって、この物語に描かれた女性間の同性愛は、ほとんど純粹の美しい友情的なものではなく、前述のごとく、常に形式としては恋愛関係にありながら、実際には右のような変態的な面を持っているのである。」(傍線は筆者による)

ここで明らかになるのは、鈴木³⁾の考える「変態的な面」の中身である。それは、男装することで多くの女性たちを惑わせ、恋愛関係を結んでいると思わせることに快感を覚えていることをさしている。但し「快感を覚えている」というのは鈴木⁴⁾の主観で、原文にそれにあたるような描写はない。これでは前に進まないのであるが、同章の最後に「ある関係」と規定した例が示されるので、ここから「退廃性」の具体像に迫ることにする。以下引用である。

「またある関係においては、みずからは真の女性であって男装をしていると十分自覚しつつも、他の女性から心を寄せる機会があれば、能動的な活動を開始することがあるが、これらは、すでに愛情の美しさを忘れた変態的な同性愛の感情と考えてよいであろう。いずれにしても、とりかへばや物語がすこぶる官能的筆致をもって変態的同性愛のごとき退廃的な愛情を描写していることは否定できないのである。」(傍線は筆者による)

ここで鈴木⁵⁾が「同性愛」と呼ぶものは、性愛としての同性愛ではなく、本来の同性愛は「変態的」ということばを冠して表されていることがわかる。いうまでもなくその認識が誤りであることを指摘した上で、次に進む。

文の構造からして、女主人公は、①「もの心細きに」（何となく心細い折とて）、立ち寄るのであり、②「さしもやはと思ひつる、同じ心なりけるも過ぐしがたくて」（まさかと思っていたのに、相手が変わらぬ気持であったのもそのまま見過ごしがたくて）立ち寄るのである。一度目の出会いが「情けなからぬほどに」つまり、つれなく思われぬ程度に、偽装を見破られないための行動であったのに対し、二度目は自分の意思で立ち寄っているため、鈴木の言う「能動」性は一度目より大きい。しかし、立ち寄りたくなる今の女主人公の状況が、この場面の直前まで独特の高揚感をもって語られるため、読者にはこの行動がごく自然なものとして受け止められる。

まず①の示す状況から見て行こう。この二度目の出会いの時期は三月の「二十日あまりの月もなきほど」とされているが、同月「ついたち頃」に行われた宮中観桜の宴において女主人公は、漢詩、舞、笛、あらゆる分野で圧倒的な才能を発揮し、並み居る人々の賞賛を浴び、右大将に昇進している。また、その直前には、《(帝は) 陣のかためなどに、年若いやんごとなき上達部などよりも、ただこの人の言ひ出でたまふをかしきことに思し、世にありがたきおほえの際なり。》[帝は年配で高い地位にある上達部などの言うことよりも、もっぱらこの人—女主人公—のご提言をすぐれたものとしてお取り上げになるといった具合で、この世にもまれな名声は、頂点を極めている。]と官僚としての有能さ、帝の信頼の厚さを示す描写がある。自己の持てる能力を存分に発揮して、完璧に輝いている今の女主人公の姿がこれでもかと積みかけられるのである。かつて「とりかへばや」[娘と息子を取り替えたい]と嘆いた父、左大臣も観桜の宴での娘の活躍に《かくても、げにいとようありぬべきことにこそありけれ》[このままでもうまくやっていたのだ]と思うのである。また、女主人公を妊娠させてわが物とした当の宰相の中将でさえ、《いみじかりける容貌、才のほどかな、かかる身をもて埋もらさんことも、我になりて思ふに、難しかし。》[すばらしい容姿、才能だったな。このような身を埋もらせてしまうのも、自分のこととして考えれば、むずかしいことだ。]と「夜もすがら思ひ明か」すのである。ましてや本人は、《あはれ、わが心ひとつこそ人に違える身と嘆かしさの絶ゆる時なけれ、大方にはかくきらきらしうなりのほる身を、跡はかなくなりなんことよ》[ああ、自分の心の中だけは、人とは違う身だと嘆きの絶える時はなかったが、大方としてはこのように華々しく昇進した身なのに、跡も残さず姿を消してしまうとは]と心閉ざされてもの悲しい思いでいっぱいである。

物語全体が女主人公の公の場からの撤退を嘆き、惜しむ空気に包まれている。文中の「埋もれる」は源氏物語（夕霧の巻）の中で、紫の上の言葉を借りて紫式部が女の生きづらさを語る部分にも見られるが、とりかへばや物語全体を通して数カ所の用例があり、「跡はかなく」同様、才能、キャリア、自分の生きた証のすべてを手離さなければならぬ無念と不安を象徴することばとなっている。

つまり①の示すのは、右大将にまで昇進した女主人公が、自ら築き上げたすべてを手離し、宰相中将（この時点では同じように昇進して中納言）だけをたよりに失踪しなければならない境遇への「心細さ」である。物語の登場人物がみな官職で記されることが示すように、公的な立場の喪失は

女主人公にとってアイデンティティの喪失、存在そのものへの喪失ともいえるものであった。

次に②の背景について述べる。女主人公は前述のような賞賛の中で右大将に昇進するのだが、その後、たとえ「精神的のみの〈虚像〉」(辛島正雄『とりかへばや物語』における『源氏物語』撮取-四の君密通事件の場合-より引用)の夫婦関係であるとはいえ、妻の四の君が宰相中将に贈った《上に着る小夜の衣の袖よりも人知れぬをばただにやは聞く》[上に着る夜の衣の袖よりも人に知られぬ衣のことを-夫の昇進よりも、あなたのご昇進を-並々ならぬ嬉しさでお聞きました]という歌を目にし、《男も女も、頼もしげなきものは人の心かな》と、人の心の信じがたさを思い知らされて深く傷つく。因みに無名草子はこの歌を詠む四の君の外面と内面のギャップの激しさを「いとうたてけれ」と非難しているほどで、女主人公のショックの大きさを十分感じ取らせる場面である。いうまでもなく女主人公の性自認は女性であるし、性的指向も同性である女性にはない。この傷心は「男も女も」とあるように人の心というものへの不信によるものであるが、同時に自ら演じ続けられる「男性性」への限界の自覚という「^{とどめ}止め」の役割も果たしているのかもしれない。

性自認は女性であるが、男性としての性別役割を生きる女主人公の人間関係は常に緊張にさらされていて、完全に心を許せる相手はいなかったはずである。しかし、この不安と傷心の中、失踪を前に訪ねようとした麗景殿の女には、どこか心やすらぐものを感じていたのであろう。「頼もしげなきは人の心」と打ちのめされていた心は、「同じ心」でいてくれた相手との語りの中で、しばし慰められたにちがいない。鈴木は「愛情の美しさを忘れた変態的な同性愛の感情」と断定しているのであるが、男女を問わず誰と心を通わせるにも、この女主人公には男としての役割をまとう以外の方法がないことを忘れてはならない。性的指向が同性である女性になくても、気の合う女性はある。苦しい時に傍にいてほしい女性もいる。しかし、男装のこの女主人公の場合は、そんな女性と会う時にも、疑似恋愛の形をとるしかないのである。「恋愛関係を結んでいると思わせること」は「快感を覚え」る行為なのではなく「性別役割の一環」「対人関係のツール」であることを作者は随所で伝えている。無名草子に代表される当時の読者たちもそれを理解していた。理解しながら、この場面には須磨退去を前に花散里を訪ねる光源氏を重ね、宝塚歌劇の男役が繰り広げる恋愛絵巻を見るように、源氏物語の「女にて見ばや」「女にて見奉らまほし」を地で行くニューヒロインの登場にうっとりしたり、自分たちの果たせぬ活躍ぶりに溜飲を下げたりしたのであろう。

因みに、三度目の登場場面で、すでに妹である女主人公と入れ替わった後の右大将は麗景殿の女と男女の契りを結ぶ。その場面は、「今とても世の常の乱りがはしき御もてなしはあるべきならねば」(今とても男が世の常とする淫らなお振る舞いはあるはずもないと思って油断していたところ)「やをらすべり入れて戸を押したたてたまへる」(そっと部屋にすべり入って戸を閉めておしまいになったので)と記され、作者は女主人公と麗景殿の女の関係が戸を隔ててのもの(=浮ついたものではない)ことを付け加えることを忘れてはいないのである。

ちに立ち向かってくるのである」

いうまでもなく中村は、古典文学に精通し、多くの著作を残した作家・評論家であり、とりかへばや物語についてもその現代語訳を手がけるなど造詣が深い。しかし、「異性愛も同性愛も可能であって、性の快樂の領域は無限に拡大されている」という断定が、事実と異なるのは、縷々述べてきたとおりである。

また、物語全体を覆っている空気は、明るく快樂的なのではなく、暗鬱たる厭世観と度外れな感傷主義」という件についても、感じ方の違うところで、本文を引用する字数の余裕がないのが残念であるが、女主人公の人物造形には、今までの物語のヒロインにはない明るさ、闊達さ、行動力があり、物語からは一種開放的な空気さを感じることができる。率直に言って、どのように読んでも筆者には「恐ろしい性の深淵、本来、社会生活の中に安全にはめこまれることを拒否する性の地獄」を感じ取ることができなかつた。

では、なぜこのような感じ方の違い、作品観の違いが生じてしまうのであろうか。鈴木説と同じく同性愛というものへの認識のズレ、ジェンダーの観点の欠落に加え、「この物語の作者が、特殊に変態的であったというのではなく、この院政時代そのものの社会の雰囲気、そのようなものであった、ということだろう。」と述べていることからわかるように、時代の風潮との同一視である。別の著書「色好みの構造」(1985年岩波新書)においても、とりかへばや物語を「この時代の貴族たちの「色好み」の対象が、遂にソドムとモゴラのデカンダンスの地獄まで転落してしまっているということを示していよう」と評した後、背景としての院政時代の同性愛の記録を藤原頼長の日記台記から、白河、鳥羽、後白河という専制君主たちの無軌道な性的放縦ぶりを今鏡や古事談から引いている。しかし、とりかへばや物語の中にそれにあたるようなものはひとつも出てこないのである。

3 学校教育への影響 ～「国語便覧」等の中の「とりかへばや物語」

次に、これら時代を代表する研究者、評論家の評言が、どのように現在の学校現場で使用される教材に影を落としているかを見ていきたい。とりかへばや物語は源氏物語や枕草子等のように、その一部であれ高等学校の国語教科書に原文が掲載されることはない。したがって広く高校での学習者が、作品への知識を得るのは、「国語便覧」や「日本文学史」といった副読本中の解説文を通じてということになる。以下に教育現場で(2015現在)使用されている主な副読本から、とりかへばや物語に関する記述を拾い出してみた。

A 奇抜な趣向が特色で、平安時代末期の退廃的・獵奇的傾向①の強い作品である。

[新総合図説国語 東京書籍]

Dは、異常性を意味する「性の倒錯」の語が未だ使われている。この表現は二つの意味で不適切である。ひとつは女主人公とその兄に、編者が言うところの「性の倒錯」はないこと、つまり物語理解上の事実誤認。今ひとつは同性愛等の性的少数者を、異常を意味する「倒錯」ということばで表現することの誤りである。

Eは、⑤で「退廃」とは、男の子が女の子のように、女の子が男の子のように育つことだと明記した文である。前述した鈴木説における「退廃性」の本質にびたりと重なる。しかも「退廃」に世紀末がついていることから、Aの①同様、前述したような「同一視」が働いていることも明らかである。

作品の評価というものは、それを読む人々が生きる社会の常識や価値観と無縁ではありえない。しかしそれにしても、とりかへばや物語が被った評価は不当に低いものであったし、残念ながらそれは今も教育現場で使用される副読本に残っているのである。

4 結びにかえて

性(生物学的性)と人の生き方(社会的役割)が寸分の狂いもなく一致していなければならなかった時代、そこに不条理や生きづらさを感じていた人々がいたことを、私たちは紫式部などがごく控えめに発したメッセージの中に見ることができる。が、それをここまで直截に突きつけた古典文学はなかった。「自分の能力を発揮して生きたい」、「社会的な存在でありたい」という思いをヒロインの心理描写や地の文のみならず、本稿で引用した父左大臣の「このままだって(別に男女を取り替えなくても、娘は)立派にやれているじゃないか」や、宰相の中将の「こんなにすごい才能を持っていながら家に引き籠ってしまうなんて、自分なら耐えられないよな」のように男たちにもつぶやかせてしまう開放性、社会の制約にとらわれず能力を発揮して生きることへの肯定観、に圧倒される。

不当に低い評価を被りながらも生き残ってきた作品には、人が人として求めて止まない普遍的な思いが込められている。とりかへばや物語の場合それが読む者を惹きつけ、同時に、一方で大きな忌避感と拒絶反応を引き起こし、ぬぐいきれない負の烙印を押されることになってしまった。しかし、今、時代の方からこの物語を求めている。本稿が、とりかへばや物語教材化への一助となれば幸いである。

参考文献

I 本文・注釈書

- 1) 石野敬子・三角洋一『住吉物語・とりかへばや物語』新編日本古典文学全集 小学館 2002年
- 2) 鈴木弘道『とりかへばや物語の研究 校注編・解題編』笠間書院 1973年
- 3) 大槻修・今井源衛・森下純明・辛島正雄『堤中納言物語・とりかへばや物語』新日本古典文学大系 岩波書店 1992年

- 4) 山岸徳平訳注『無名草子』角川文庫 1973年

※本文の引用は1)、4)によった。

II 研究書・評論書

- 1) 中村真一郎 日本古典にみる性と愛 新潮社 1975年
- 2) 中村真一郎 色好みの構造 岩波新書 1985年
- 3) 河合隼雄 とりかへばや、男と女 新潮社 1991年
- 4) 白洲正子 両性具有の美 新潮文庫 平成9年
- 5) 服藤早苗 平安朝の女と男 中公新書 1995年
- 6) 橋本治 性のタブーのない日本 集英社新書 2015年

III 通知文

- 1) 「性同一性障害に係る児童生徒に対するきめ細かな対応の実施等について」(平成27年4月30 文部科学省)